



医学教育の今!

学修成果(アウトカム)基盤型教育(1)

千葉大学 名誉教授
た な べ ま さ ひ ろ
田 邊 政 裕
Masahiro TANABE

要旨

- ・学修成果を重視する国際的な流れに対応する教育改革の一環として、大学における「卒業認定・学位授与の方針」、「教育課程編成・実施の方針」、そして「入学者受入れの方針」の三つの方針を踏まえた学修成果基盤型教育への転換が進行している。
- ・学修成果基盤型教育成立の経緯を概説し、その定義と特徴を紹介した。

はじめに

高等教育のグローバル化が進む中、学修成果を重視する国際的な流れを踏まえつつ、それに対応する教育改革の一環として、各大学が「卒業認定・学位授与の方針」、「教育課程編成・実施の方針」、そして「入学者受入れの方針」の三つの方針を明確にして示すことの重要性が提言された¹⁾。この提言を受けてすべての大学において、その教育上の目的に沿って「三つの方針」を策定し、公表することが学校教育法施行規則の改正により2016年から求められるようになった²⁾。「卒業認定・学位授与の方針」により学修成果(アウトカム)が可視化され、「教育課程編成・実施の方針」により、学修成果を達成するための教育課程の編成が求められたことで、わが国の大学教育は学修成果基盤型教育(outcome-based education, OBE)へと移行した³⁾。医学教育においても医療安全、医師の質保証等の観点から、学修成果を重視するOBEが既に導入されており^{4,5)}、全医学部・医科大学は、卒業生が「何ができる」かを医学教育のアウトカムとして社会に明示し、その達成を証明することが求められている。「何ができる」をコンピテンシー(competency)(表)⁶⁾に置き換えて、OBEはcompetency-based educationとも定義される⁷⁾。

表 主な用語の定義

- ・ Competency (コンピテンシー): 知識、技能、価値観、態度などの多様な要素を包含した保健医療専門職の測定・評価可能な個別の実践的能力であり、コンピテンスの構成要素と見なすことができる。教育、研修の最終段階で獲得できる学修成果である。

文献 6) を参考に作成

卒前医学教育、卒後研修、専門研修、生涯教育と継続する医師育成は「どのように教育する」から「(教育の結果)何ができる」を重視するOBEへとパラダイム・シフトした⁸⁾。このような現況で、OBEについての情報を共有することは、医学教育関係者のみならず一般の医療関係者にとっても有用であろう。OBEの系譜をたどりながらOBEについて概説する。

I. マスタリー・ラーニングから学修成果基盤型教育へ

1. マスタリー・ラーニング(完全習得学習)

OBEの系譜をたどると、1960年代に米国の教育学者 Bloom によって提唱されたマスタリー・ラーニング(ML)を基盤として、1980年代に成立してくる米国における学力保障論に行きつく⁹⁾。彼は、学校教育における落ちこぼれ問題に対して、子ども一人ひとりの

能力や適性に応じた授業改革によって「成果の平等」を達成することで、学力保障が実現できると主張し ML を提唱した。ML の概要は以下のような教育である¹⁰⁾、(1) 学習單元において達成されるべき目標群を明らかにする、(2) すべての子どもたちが到達すべき最低到達基準（マスタリー基準）を定める、(3) 各目標のどれが既に達成され、どれが未達成であるかを明らかにする形成的テストを実施する、(4) 各目標が未達成である場合、必要な教材や治療的指導を形成的テストで明らかになった各学習者の課題に応じて与える。

この教育理論は、1970 年代に米国、ニューヨークのジョンソン・シティーの特定の校区における教育改革として実践された。その改革の成果は、さまざまな指標によって示されているが、当初市内学校群中最下位であった実施校区の学力水準が学力トップ校 10% に入るまでになったことが象徴的であり、その成果は全米で知られるようになった。この取り組みは、ODDM (the Outcome-Driven Developmental Model) として定式化されて普及し、「すべての生徒はよく学ぶであろう」というミッションの下に選択・構成された「意義のある学習成果 (outcomes of significance) *1」に基づいた教育が実践されたことで、カリキュラムの抜本的な変革へと繋がった⁹⁾。

*1 一般のおよび小中高等学校までは学習成果、大学では学修成果として表現した。

2. 学修成果(アウトカム)基盤型教育

この教育改革をさらに進めて OBE を確立したのは、「OBE の父」と呼ばれる米国の教育社会学者 Spady である。彼はアウトカムを以下のように定義している。「成果とは、ある文脈上で行われる意義のある学習 (significant learning) の質の高い最終結果の実証 (demonstration) である」¹¹⁾。この定義を踏まえて、Spady は OBE の特徴を以下の 4 つの言葉で表現している、clarity of focus, designing down, high expectations, expanded opportunity¹²⁾。第一は、学習の終わりに学生が明示できる意義のある学習成

果と方略、評価を明確にして、事前にそれらを学習者と共有する (clarity of focus)。第二は、カリキュラムを学習成果から遡って作成する (designing down)。第三は、すべての学習者が取組めるような高次レベルの学習成果を設定し、それを達成できるような適切な学習が提供されることで、全員が最終的にその成果を達成できることが期待される (high expectations)。第四は、全ての学習者が学習成果を達成できるように時間 (学習時間、学習期間、学習時期等) を弾力的に運用できるように選択の機会を拡大する (expanded opportunity)。

OBE では特に、「意義のある」(significant) と「実証」(demonstration) が重要であり、Spady が ML を OBE へと進化させたキーワードである。OBE を医学教育に適用すると、学修成果は自由に設定するのではなく、医学部卒業時の能力 (患者の安全を担保し、臨床研修を開始できる能力) というような意義を内包することが求められる。医学部卒業時の学生の学修成果の実証とは、臨床実習で学生が患者に対して成果 (能力) を発揮できることであり、それが評価、証明されなければならない。このような定義や四つの特徴を踏まえて、医学教育を OBE として構築することで、医学機関は卒業生の能力を育成、保障し、説明責任を果たすことが可能になる。

((1) 終わり、(2) に続く)

文献

- 1) 学士課程教育の構築に向けて (答申). 平成20年12月24日中央教育審議会.
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf (引用日2024.8.31)
- 2) 「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー), 「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー) 及び「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン(平成28年3月31日 大学教育部会).
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1369248.htm (引用日2024.8.31)
- 3) 田邊政裕. 学士課程教育の三つのポリシーとアウトカム基盤型教育. 医学教育. 2017;48(4): 237-242.
- 4) Harden RM, Crosby JR, Davis MH. AMEE Guide No.14: Outcome-based education: Part1-An



- introduction to outcome-based education. *Med Teach*. 1999; 21(1): 7-14.
- 5) 田邊政裕、朝比奈真由美、伊藤彰一、他. 千葉大学医学部における学習成果基盤型教育 (Outcome-based Education) の実質化—順次性のあるカリキュラム編成の工夫. *医学教育*. 2011; 42(5): 263-269.
 - 6) Englander R, Cameron T, Adrian J. Ballard AJ, et al. Toward a Common Taxonomy of Competency Domains for the Health Professions and Competencies for Physicians. *Acad Med*. 2013;88(8): 1088–1094.
 - 7) 田川まさみ、田邊政裕. コンピテンス基盤型教育 Competency-based Education. *千葉医学*. 2006;82(6):299-304.
 - 8) Carraccio C, Wolfsthal SD, Englander R, et al. Shifting Paradigms: From Flexner to Competencies. *Acad Med*. 2002;77(5):361-367.
 - 9) 田中耕治. 第三章 OBEの現状と課題—アメリカにおける学力保障論の展開—. 稲葉宏雄編「教育方法学の再構築」. あゆみ出版; 1995:71-92.
 - 10) 梶田毅一. 3マスタリー・ラーニング(完全習得学習)の理論と実践 4ブルーム理論の基本構造 第一部ブルーム—人と理論 ブルーム理論に学ぶ 教育選書4. 明治図書; 1986:27-82.
 - 11) Spady WG. Choosing Outcomes of Significance The Challenge of Outcome-Based Education. *Educational Leadership*. 1994;51(6):18-22.
 - 12) Spady WG, Marshall KJ. Beyond Traditional Outcome-Based Education. *Educational Leadership*. 1991; 49(2): 67-72.